

誰からも信頼される  
パイロットを目指して

鹿児島空港からの離島便を中心に運航する日本航空グループの日本エアコミューター（JAC）で、初の女性パイロットとなった濱田江梨さん。3月にフライトデビューを果たし、現在も副操縦士として忙しくも充実した日々を送っている。女性パイロットは全国的にも少ないが、「空を飛ぶ責任の重さは女性も男性も変わらない」と話す濱田さんに、パイロットになるうと思っただきっかけや仕事の醍醐味、将来の夢を伺った。

日本エアコミューター株式会社

はま だ えり  
濱田 江梨さん

Eri Hamada

## パイロットになるうと 思ったきっかけは？

私は宮城県仙台市の出身なのですが、大学が沖縄だったんです。それで飛行機を利用することも多く、自然と「空の仕事をしたい」と考えるようになりました。また、客室の窓からではなく、目の前で空を見たいと思ってパイロットの道を目指しました。

大学卒業後、宮城県にある航空大学校に入学したのですが、入学試験は、高校時代に物理を選択していなかったので大変でした(笑)。友人に教科書をゆずってもらって勉強強し、2回目の挑戦で入学することができました。その時は本当にうれしかったですね。

同期は全員男性だったので、最初は少し戸惑うこともありましたが、一緒に訓練をしていくうちに大



切な仲間として絆が深まっていったような気がします。厳しい訓練でつらくなった時も、昨年の東日本大震災で実家が被害に遭った時も、仲間の支えがあったから前へ進むことができたと思っています。彼らにはすごく支えてもらっているし、本当に感謝しています。

## 初めてのフライトは いかがでしたか

もちろん訓練で空を飛んできませんでしたが、初めてお客さまを乗せてのフライトは、当たり前のことですが緊張しましたね。到着した時は、とにかくほっとしました。当日は少し曇っていましたが、雲を抜けるときれいな空が広がっていて、やっぱり空はいいなあと思いました。

初フライトで徳之島を離陸する時はたくさんの方に見送っていただきました。JACの機体を利用するお客さまはボーディングブリッジ(※)を使用せずに搭乗されるのですが、その際、コックピットにいる私に手を振ってくれる小さいお子さまもいらつしやいます。パイロットは直接お客さまと接する機会があまりありませんが、こうしてお客さまを身近に感じることができるのはJACならではかなと思います。

※ターミナルビルから旅客機に乗客を乗降させるための設備。

## 鹿児島島の印象は？

鹿児島は大学校時代によく訓練で飛んできたこともあって、なじみやすかったですね。大変住みやすいですし、自然が豊かなところが仙台にも似ていると思います。休日は友人と霧島にドライブに行くことが多いですね。

鹿児島は離島が多く、飛行機は島民の方々にとって大切な交通手段だと思います。私も大学が沖縄だったのですが、その大切さがよく分かります。離島便が多いJACに入社したのは、そんな方々のお手伝いが少しでもできればという思いもありました。いつかは両親を乗せて、奄美大島に連れていきたいと思っています。

## 子どもの頃は

## どんなお子さんでしたか

海のすぐ近くで育ったので、海の生き物にすごく興味を持っていました。大学時代には海洋自然を専攻していて、水族館の飼育員になるうと思っただけでもあったんですよ。

また、小中高の10年間、バスケットボールに打ち込んでいました。そのときに「最後まで諦めずにやり通すこと」の大切さを学べたことは、とて

も大きかったと思います。どんなに難しいことでもまずは挑戦してみること。今でもそれは私のモットーであり、大切な言葉でもありますね。

## 今後の夢は？

やはりパイロットを続けるからには、機長を目指しています。飛行時間や知識、経験を積み、さらに勉強することもたくさんありますので、決して諦めることなく、焦らずに頑張っていきたいです。

同時に、さまざまな人たちの協力があったはじめて飛行機は空を飛ぶことができるわけですから、常に感謝の心を忘れずに、周りの方々に信頼されるパイロットになりたいと思います。



訓練を共にした仲間たちと。「いい仲間に出会えて、本当に感謝しています」